



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十七年五月十五日 印刷
昭和二十七年五月二十日 再版発行
昭和二十八年一月一日 三版發行

(亂丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠 (第八卷)

定価三百八十円

送料 五〇円

著作権者 中里幸作

発行者 山田福太郎

印刷者 森高繁雄
東京都品川区南品川五ノ十三

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地
大菩薩峠刊行会

発行所 株式会社 彩光社

振替 東京 一九三九七八番
電話 神田 (25) 二二六四番

富士高速印刷株式会社印行

大
菩
薩
峠

第
八
卷

目次

流轉の卷……………五

みちりやの卷……………三九

題
字

裝
畫

口
繪

道
重
信
教

橫
山
大
觀

岸
田
劉
生

編纂責任

梁 寺
取 島
三 証
義 史

二十四
流
轉
の
卷

宇治山田の米友は碓氷峠の頂、熊野權現の御前の風車に凭れて、遙かに東國の方を眺めてゐる。今、米友が凭れてゐる風車。それを米友は風車とは氣がつかないで、單に凭れ頃な石塔のたぐひだと心得てゐる。米友でなくても誰もこの平たい石の塔に似たものが風車だと氣のつくものはあるまい。子供達は紙と豆とでこしらへた風車を喜ぶ。ネザラントの農家ではウキンドミルを實用に供し、同時にその國の風景に情趣を添へてゐる。が、世界の何處へ行つても石の風車といふのは人間の常識に反いてゐる筈だ。併し、碓氷峠にはそれがある。

碓氷峠のあの風車

誰を待つやらクル／＼と

あの風車を知らない者には、この俗謡の情趣が判らない。

誰が、いつの頃この石に風車の名を與へたのか、また最初にこの石を神前に据ゑつけたのは何の目的に出でたものか、それはその道の研究家に聞きたい。

一度廻らせば一劫の苦輪を救ふといふ報輪塔がよくこの風車に似てゐる。明治維新の時に神佛の混淆がいたく禁ぜられてしまつた。輪廻といふ佛説を意味してゐる輪塔が、何とも名をかへようがなくして風車といひ習はされてしまつたのなら、右の俗謡は大凡維新の以後に唄はれたものと

見なければならぬのに、事實は、それより以前に唄はれてゐたものらしい。

併し、昔も今もこの風車は、風の力では廻らないが、人間が廻せばクル／＼と廻る。物思ふことの多い若き男女は、熊野の神前に祈つて、さうしてこの車をクル／＼と廻せば、待つ人の辻占つじうらになるといふ。

宇治山田の米友は、そんな事は一切知らない。米友は風習を知らない。傳説を知らないのみならず、歴史を知らない。

歴史のうちの最も劃時代的なことを知らない。この男は、死んだお君からいへせれば、素敵な學者ではあつたけれども、まだ古事記を讀んではゐないし、日本書記を繙ひもといてもゐないのであります。

ですから風車の事は暫く措おき、今、自分がかうして現に立つてゐるところの地點が、日本の歴史と地理の上に由々しい時代を劃した地點であるといふやうな事には、一向頓著がないのです。

おはたらひこそしわけすもこと
大足彦忍別天皇の四十年、形は即ち皇子にして實は即ち神人……と呼ばれ給ふたヤマトオグナの皇子がこのところに立つて、

「吾孀わがつまはや」

とやる瀬なき英雄的感傷を吐かれて以來、この地點より見ゆる限りの東を「あがつまの國」といふ。

その碓氷峠の歴史地理の考證については後人がいろ／＼の事をいふけれど、この「あがつまの國」に残る神人の恨みは永久に盡きない。蓋し、石の無心の風車が無限にクル／＼と廻るのも、歸らぬ人の魂の無限の底から汲み上げる汲井輪の努力かも知れない。

上代の神人は申すも畏し、わが親愛なる、わが微賤なる宇治山田の米友に於てもまた、この「あがつまの國」にやる瀬なき思ひが残るのです。

それ以來、米友には死といふものが、どうしても判らない、死といふものを現にまざ／＼と實見はしてゐるけれども、その實在が信ぜられない。

この度の道中に於ても、米友が——若い娘を見る毎に、それと行き違ふ毎に、物に驚かされたやうに足を止めて、その娘の面を篤と見定め、後ろ姿をすかし、時としては殆んど走り寄つて縋り付くほどにして、さうして、諦めきれないで、いはう様なき悲痛の色を浮べて立つことがある。

その時には流石の道庵も冷評きれないで横を向いてしまふことさへある。

さればかうして高きところ、人無きところに立つて、感慨無量に「あがつまの國」を眺めるのも無理はありませんまい。

さて、米友をひとり此處へ残して置いて、連れの道庵先生は何處へ行つてゐる。

道庵は峠の町で少し買物があるからといつて、米友を先にこの熊野の権現の石段を上らせて置いたのですが——それにしてもあんまり來やうが遅い。

道庵の氣紛れは今にはじまつた事ではない。或る時は長くなり、或る時は短くなるのも今にはじまつた事ではないが、氣の短い一方の米友が、かうして別段にぢれ出さうともしないのは、遙かに東を望んで泣いてゐるからです。

「あッ」

暫くたつて氣がつかしました。鴉が啼いて西へ急ぐからです。

そこで、米友は玉垣へ立てかけて置いて置いた杖槍を取るが早い、轉ぶが如くに權現前の石段を一息に馳せ下りました。

「今日は」

權現の前の石段を一息に馳せ下つたところは碓氷の貞光の力餅です。

「先生はどうしたい、先生は——」

その丸い眼をクル／＼として、力餅屋へ亂入しましたけれど、餅屋では相手にしません。

「先生……おいらの先生……」

次に米友は、その隣りの茶店へ亂入しましたが、茶店でも取り合ひませんでした。

「ちえッ」

米友は舌打ち鳴らして地團駄を踏みました。どうも見廻した處に、この近邊にわが尋ねる先生の氣配がない。

茶店の隣りが荒物屋——その隣りの酒屋だ。この邊りで鼾の聲がするだらう……てつきり——とのぞいて見ても、道中の雲助共が、ハダかつてゐるだけで先生の姿が見えない。

「ちえツ、世話の焼けた先生だなあ」

米友が再び地團駄を踏みました。人家すべて廿を數へる碓氷峠の上の宮の前の町、一點に立てば全宿を見通すことも、全宿の通行人を一々檢分することも出来る、さりとて、わが先生の大蛇おろちの鼾が聞えない。

一旦、宿並しゆくばなびの店といふ店を一々探し廻つた揚句、また再び宮の前へ戻つて、坂本方面を見通して見たが、そこにも先生の氣配けはいがありません。

「ちえツ、本當に世話の焼けた先生だなあ」

米友は宮の前の石段の下に立つて三たび地團駄を踏みました。本當に世話の焼けた先生である、生命にこそ別條はあるまいけれども、責任觀念の強い米友は、若しやと井戸の中まで覗いて見た上に、峠の宿を裏返し表返しに覗いて歩きました。

かうして血眼になつて東西南北を馳巡つてゐる米友の姿を、廣くもあらぬ峠の町の人々が認めない譯には行きません。

「お兄さん、エ、コリヤどうなりました、迷子まごに……エ、迷子はお前のお連さんでござりますか、年はお幾つ位」

訊ねて見ると、どちらが迷子だかわかりません。迷子は年の頃五十を越したお醫者さん。それを尋ね廻つてゐる御當人は子供だか大人だか、ちよつとは見當がつかない。

峠の町の人は暫く呆れて見てましたが、それでも要領を得て見れば、この一種異様な迷子さがしに多少の同情を持たないわけには行かないし、最初、藪から棒に先生はどうしたと詰問されて相手にしなかつた家々の者まで、本氣になつてその求むる迷子についての知識を寄せ集めてくれました。

そのいふところによると、たしかに米友のいふ通りの人相骨柄の人が、力餅を二百だけ買つて竹の皮に包ませ、蠟燭を二丁買つて懷へ入れ、さてその次の酒屋へ來ると、急に氣が大きくなつて、雲助を相手に氣焰を吐いてゐたことまではわかつたが、それから先が雲をつかむやうです。そこへ、ひよつこりと現れた一人の雲助が、

「ナンダ、その先生か、そんならう、ん州が駕籠に乗つて、いゝ心持で軒をかいでござつたあ、今時分は輕井澤の櫛形の茶屋あたりで女郎衆にいちめられてござるべえ」

この言葉に米友が力を得ました。

一一

そこで宇治山田の米友は、峠の町から輕井澤を目がけて一散に馳け出しました。

これより先、道庵は、ちよつと買物をするつもりが、雲助を相手に、酒屋へ入るといふ氣持ちになり、浮つかりその駕籠に乗せられて、有耶無耶のうちにかつぎ出されてしまひました。

峠の町から輕井澤までは僅か十八町、且、下り一方の歸り駕籠ですから、かつぐ方もいふ心持、乗る方は一層いふ心持になつて、大駢で疲込んでゐるものですから、またゝく間に輕井澤の宿の入口の杵形の茶屋まで著いても、まだ目が醒めません。

こゝで、雲助はこの拾ひ物のお客をおろすと、宿の客引と、飯盛女が群がり來つて袖を引つばること金魚の餌を争ふが如しです。道庵、眼をさまして、はじめて驚き、

「しまつた！」

醉眼朦朧として四方を見廻したけれども、もう遅い。

「お泊りなさんし、丁字屋でございます」

「江戸屋でございます」

「手前は佐忠で……」

「三度屋はこちらでございます」

「温かい御飯の冷えたのもございます、名前の二八蕎麥の延びたのもございます、休んでお出でなさいませ」

道庵、いかに、デタバタしても、もう動きが取れません。

よし、かうなる以上は、この茶屋へも話して置き、何處ぞ然るべき宿へ御腰を据ゑてから、人を走らせて米友を招くに如かじ、と決心しました。その途端に、

「ねえ、旅のお先生、わたしどもへお泊りなさんし、玉屋でございます」

あだつばい飯盛女が、早くも道庵の荷物に手をかけたものですから、道庵も鷹揚に頷づいて、その案内で榊形の木戸から輕井澤の宿へ入り込んだものです。

「はゝあ」

道庵は物珍しげに輕井澤の町を見廻して、頭上にけぶる信濃なる淺間ヶ嶽に立つ煙をながめ、

「はゝあ、いよゝ信濃路かな、一茶の句に曰く、信濃路や山が荷になる暑さかな……處が今はもう暑くねえ」

と嘯うそぶきました。

時は、無論、山が荷になるほどの暑い時候ではなかつたけれど、さりとてまだ、ゆきたけつもり、て裾の寒さよ、とふるへ出すほどの時候でもありません。

幸ひにして碓氷峠は紅葉の盛りでありました。坂の宿から峠の上まで、道庵は名にし負ふ碓氷の紅葉に照らされて、醉眼を、いよゝ眞赤まっかにして上つて來ましたが、上野かうづけと信濃の國境は夢で越え、信濃路に入つてはじめて淺間の秋に觸れました。

こゝに、便宜上、武州熊谷以來の旅程を示すと、

熊谷から深谷まで二里二十七丁。深谷から本庄まで二里二十五丁。本庄から新町へ二里、この間に武州と上州との境があつて、新町から倉ヶ野へ一里半。倉ヶ野から高崎へ一里十九丁。

高崎は松平右京亮八萬五千石の城下。それより坂鼻へ一里卅丁。坂鼻から安中へ三十丁下り、ここは板倉伊豫守三萬石の城下。安中から松井田へ二里十六丁。

松井田から坂本へ二里十五丁。かうして今や上州の坂本から、二里三十四丁二十七間の丁場を越えて信濃國輕井澤の宿に著いたといふわけであります。

輕井澤へ來て、醉眼を見はつて見ると、その風物のいとど著るしいのに道庵は眼をきよろづかせないわけには行きません。

空を見れば淺間ヶ嶽が燃ゆる思ひの煙をなびかせ、地を見れば三宿の情調が、いとど旅感をそゝるに堪へてゐる。七十八軒の本宿に二十四軒の旅籠屋。紅白粉の飯盛り女に見とれるやうなあだつばいのがある。成程これでは道中筋のお侍達がブン流してお差控へを食ふのも無理はないといふ年をした道庵が餘計な處へ同情をしながら歩きました。

道庵先生は玉屋の店の縁先へ腰をかけて足を取り、洗足のお湯の中へ足を浸してゐると、旅籠屋の軒場々々の行燈に火が入りました。それをながめると道庵は足を洗ふことを打ち忘れ、

「はゝあ、初雁もとまるや戀の輕井澤、とはこれだ、この情味には蜀山も參つたげな」

事實、江戸を出て以來の情景に、道庵がすっかり感嘆しました。